

小 さ き 声

No. 89

1970.1.20

〒 189 東京都東村山市青葉町 4-1610

多磨全生園 松本馨

福音と世俗

読者の一人から、福音と世俗とどちらが大切か、すみやかに自治活動をやめて、福音宣教に専念するようと、心のこもったお手紙を頂きました。私はその誠実さにうたれ、感動しましたが、同時に私には理解できないものが含まれていることに気がつきました。それは、福音と世俗とどちらが大切か、という問題把握のとらえかたです。福音は世俗と同一線上に並ぶべきものでしょうか、比較対照さるべきものなのでしょうか。この点が私には分からないのです。世俗は、あくまでも創造者なる神の支配の下にある被造性でありましょう。福音はこの被造物なるこの世をあがなうために、創造者なる神が被造物の世界に、入ってきたことを意味します。このようなことは、私が更めて申すまでもなく、信仰者は誰でも知っていることでありましょう。

具体的に福音と世俗とをどのよう
に受取っているかと言いますと、福

音によって私は世俗の中に押し出されたのだ、と答えるほかありません。1966年6月の事です。多磨全生園に異常な出来事が起りました。二人の職員を追放する患者大会が、つむじ風のように起り、一夜事務所本館を占領してしまったのです。この事務所本館には患者は一步も入ることのできない神聖な場所だったのです。それを患者が占領してしまったのですから、この事件の異常性が分りましょう。他方患者館や事務所本館焼打ちの流言飛語が乱れとびました。事実、一部の過激な患者は焼打ちの計画をたてたようです。事務所本館占領中に空家の寮に放火した者があり、発見が一步遅れれば全生園は焼土と化してしまうという緊迫した一夜でした。

私はそれ迄、祈りと聖書暗誦の日々を過していました。それが、私に与えられた恵みであり、信仰者として生きる道だと信じていたからです。というより、それ以外に生きるすべを知らなかったのです。祈りと聖書の生活ができないくらいならば死んだ方がよいと思っていたほどで

す。50年に回心し、その時私の胸に燃えた信仰の火は、十年経っても一向に衰えず、私の身を焼き尽す勢いでした。その火の勢いの激しさ、強さは回心を経験した者でなければ分らないでしょう。そのような激しい火をなだめる道は祈りと聖書暗誦以外に無かったです。

ところが、このような生活をしてきた私の身に大きな変化をもたらしたのは、先程申し述べました患者大会なのです。私は直観的に全生園が病んでいること、このままほっておくと滅びることを感じました。事実それから二月後には、自治会は崩壊し、閉鎖されてしまったのです。全生園はそこに永住する患者にとっては村であり、町であります。その村なり町に、自治体が無いということは無政府状態を意味し、混乱と破壊を意味します。自治会を再建し、平和と秩序ある全生園を再建しなければならない、それが無教会キリスト者の私の使命である。かくて私は信仰的決断をもって世俗の中にとび込んで行きました。昨年69年6月に自治会を再建するまでに約三年かかりました。自治会規約の構想は私が建てたものであり、私が中心となって作ったものです。そのために、自治会の基礎ができるまで自治会役員として働くことになりました。全生園

の近代化運動を推進している中心的な役割を果たしているのも私です。「特別整備促進委員会事務局長」が私の肩書です。自治会規約の細則の骨子も私が作らねばなりません。このようなわけで、今すぐ自治会活動をやめることもできないし、私自身やめる気もありません。私がしている事は趣味や物好きでやっているのではなく、総ては信仰から出たことなのです。パウロは信仰によらぬことは罪だと言っています。もし私が信仰によらず自治会活動をしているとすれば、大きな罪を犯していることになります。しかし、それはあくまでも信仰から出たものであります。私個人の願いは自治活動をやめ、この世には手を染めず、祈りと聖書の生活をする事です。そのことが私にとって最も楽しいときであり、心の充実したときであります。自治活動は与えるだけで、得るものは何もありません。その空しさ、その救いなさ、その罪的な業務、無意味な論争、無意味なかけひき等、私にとっては耐えきれない世界です。にも拘わらず、自治活動に従事しているのは全生園の再建が私の使命であると信仰的決断をしたからです。もし信仰が無ければ、詩人のように鳩の翼をもってこの世界から逃亡するでしょう。世俗とは、具体的に福音の働く

場所であり、愛の業が行なわれる場所でもあります。

私が関根先生の「世俗の中の福音」に同感するのは単に先生の教えに同感している、ということではなく、私自身が具体的な事件を通して信仰の世界から世俗の世界へ押し出されたためであります。しかし如何にこの世のために働いても、そこから受くるものは悲哀と孤独であり、十字架以外に私を慰めてくれるものはありません。それ故に自治活動をしなごら一日も早く、この世界から逃れたいと願っています。しかし一方では、この世のために責任を果さねばならぬという信仰の声が、私をこの世へと馳り立てます。この二つの相容れない矛盾が一生私につきまとうことでしょうか。そしてこの矛盾の中で終末への期待はいよいよ強くなって行きます。真の平和、真の秩序は自治活動によって得られるものではなく、社会主義者や資本主義者によって得られるのではなく、総てはキリストの来臨にかかっています。この終末的な希みに総てをかけて、霊と肉の矛盾の中で、福音と世俗の矛盾の中で、信仰と自治活動の矛盾の中で生きてゆくことになりましょう。自治活動をすることは信仰的でないという人にはゆるして頂きたいし、肉体的に限界状況の中で自治活

動している私を支えてくれる祈りの教友は私のしていることが肉の思いからではなく信仰から出たものであることを信じて頂きたいのです。信仰無くしてどうして私に限界以上の仕事ができるでしょうか。

死の家覚え書

No65

月 日

南条秋雄へ

花岡健

その後、如何ですか。咽喉の工合が悪くてひどく苦しんでいると、この付添夫さんから聞きました。どう言って君を励ましたらいいのか、僕は言葉を知りません。この処、毎夜と言ってよいでしょう、夜半に裏窓から君の病室を見るのが習慣になってしまいました。いつ見ても君の枕許に、田代君の起きている姿がカーテンの隙間に見るからです。ということは君の咽喉の工合が悪くて、君が苦しんでいることを語っているからです。気候のせいもあって僕も熱が下らず困っていますが、君の負っている苦しみを思えば、僕のことなど恥しくて口に出して言えません。それにしても、この世界は何という絶望的な世界だろうか。「神在りや」と問わざるを得ないほどに、この世界は神から遠く断絶しているよ

うに思われてなりません。ただ、わずかな慰めや、そしてかすかな希望でもありますが、イエスが僕らのためにも死んで下さったのだ、という歴史的事実であります。そこに最後の希みをかけ、信じるほかは無いです。ということ。それすらも、信仰以外に何の保障もなく、ただ絶望的に信頼するほかはありません。最終的に確かな救いは、キリストの到来という出来事だけでありましょう。十字架に在って、終末への希みを抱くことです。キリストの義とは終末への希みでは無いだらうか。キリスト再臨の約束ではないだらうか。

現実に何が起り、何が問われ、何が語られ、何のしるしが与えられようとも、それはも早問題ではなく、終末への期待だけが総てであり、総ての解決ではないだらうか。そのとき以外にこの世界の悲惨の意味を明らかにすることはできないでしょう。

祈り

主よ、いつまでなのですか
いつまであなたは私を捨てておかれるのですか
私の身体は朽ち果て、
私の息は腐り
私の生命は尽きようとしています
あなたの血潮でもって

私の傷を洗い浄め
あなたの義の衣で、
傷ついた私の魂と肉体を
包み癒して下さい
主よ、来り給え、
私の息のある間に
早く、早く主よ来り給え、
私の生命のある限り
早く、早く主よ来り給え

月 日

花岡 健へ 南条秋雄

お手紙ありがとうございます。お陰で少し楽になりましたが、心配しないでほしい。呼吸逼塞で、気を失ったり、意識を吹きかえしたりすることは、この病気の特徴で、咽喉切開者の負わねばならぬ宿命なのです。君の期待している終末がどのようなものであるか、僕の想像を越えたものですが、僕もまた別な意味で終末の来るのを待っています。そしてそれはキリストの到来ではなく、僕自身がこの世から姿を消すことです。呼吸逼塞による苦闘は、この世と彼の世との闘いなのです。生と死の闘いと言ってよいでしょう。しかし僕がここで言う意味は、生きるための闘いという意味ではなく、死ぬための闘いと言ってよいでしょう。痰が切れずに苦しんでいるとき、僕の希いは現実から解放されることです。地獄のよ

うな現実の苦しみから解放されることです。そのとき死が僕に残された唯一の希望であり、唯一の慰めなのです。痰が切れず失神するとき、僕はいつも経験します。地獄の苦みが嘘みたいに一瞬にして消え、脳の中枢部に生れた暗黒が僕を呑んでしまいます。一瞬にして地獄の苦みを経験していた自己が闇に同化してしまうのです。

どのくらいの時間を経過して、僕は意識を回復するのだろうか。意識を回復したとき、最初に僕が知るの、地平線上に昇ってくる太陽の光のような金色の光芒であります。その美しい輝きに打たれて自分は神の国に移されたのではないかという考えが起ります。そしてその次に呼吸難からくる胸の苦しさに初めて現実に戻り、「しまった!」と仰天します。「しまった!」は無意識に発する言葉なのですが、如何に僕の全存在が死を希んでいるか君に分って頂けると思う。こう書いたからと言って僕は神を捨てたわけではない。捨てたのは僕ではなく、神が僕を捨てたのです。君には義の神でも、僕には悪魔的な神なのです。君には恵みの神でも、僕には僕を打つ怒りの神であり、審判の神なのです。君に愛の神でも僕には冷酷無情の神なのです。どうして僕はこの神にすがることができ

よう、求めることができよう。僕にとって死のほうが遙かにやさしい愛の神なのです。慰めの神なのです。しかしその死も今は希むこともできないし、待つこともできません。死もまた僕を見捨てているからです。

今僕が切に希むことは眠ることです。眠りだけが僕に休みを与えてくれるでしょう。けれどもそれさえ神は僕から奪ってしまいました。夢の中にまで入って来て僕を苦しめ、僕を悩ますからです。僕は今君に何を書こうとしているのだろうか、それさえ僕にはよく理解できないほどに混乱しています。君の方で判読し、理解してほしいと思います。けれども僕が何を書き何を考えていようと現実ほどに、ものすごくはないのです。それ故に心配しないで下さい。今この瞬間に、或いは今夜僕の恋人であり、愛人であり、希望である死が突如として現われるかも知れません。そして君に別れを告げるひまもなく愛人のふところに抱かれてこの地獄の世界から解放されるでしょう。そのとき君はこの手紙が君に対する訣別の言葉であることを理解してほしいのです。二度と君に手紙を書くことが無いよう、そのときの来るのを待っています。そしてそのとき君が僕に替って神にとりなしてくれるようにお願いします。

療養通信

神の怒り

“神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。”(ロマ 1 - 18)

一月二日の夜、風邪気味で少し熱を出しましたので、三日は寝正月と決めました。そして、床の中でふと一月三日は亡妻の命日であることに気がつき、いささか愕然としました。二十年の歳月は何かの機会でなければ思い出せないほどに、亡妻と私の間を隔ててしまったからです。その床の中で二十年前の事を想起すると共に、更めて神の恵みの如何に大いなるものであるか、またそのご計画の如何に深いかを痛感しました。亡妻の死を通して私に臨んだ神の怒りは神の恵みであったことを知ります。そしてロマ 1 - 18 は、ただ神の怒りとして臨んでいるのではなく、同時にそれは神の恵みであることを知ります。

亡妻の死を通して、私に臨んだ神の怒りは三回ありました。一つは亡妻の死の宣告を医師より聞かされたときです。医師の言葉に私が仰天したのは妻の死の宣告ではなく、それ

を神の怒りとして受けとらされたことにあります。私には具体的に話すことの出来ない不信と罪がありました。その不信と罪に対して、妻の死を通して神の怒りは私に臨んだことにあります。妻はそれから半月後に天に召されましたが、私を半月の間苦しめたのはこの不信と罪でありました。妻は一月五日午後十一時五十五分に天に召されましたが、その枕許で激しい苦悶に打ちのめされていました。罪の問題で苦しんでいたのですが、それははっきりと罪という形で自覚していたのではなく、自己の汚なさ、不潔さ、みにくさ、偽善さに絶望してしていたのです。私は自己が腐乱した犬のように思われたのです。その私に再び神の怒りが臨みました。北より地鳴りのような恐ろしい音が近づいて来たかと思うと、病棟はアツという間に大嵐に吞まれてしまったのです。病棟はきしみ、硝子戸はわめき、窓外の木や電線は呻き、土砂や物の吹き飛ぶなど、物すごい荒れ方なのです。それが私の不信と不義を責める神の怒りに感じられたのです。しかし、私は恐怖におののき乍らも必死に怒りの神を否定しました。寒冷前線の通過で、私に直接関係は無いと。

三回目は三日の夕方、遺体安置室で起りました。亡妻にどうしても告

白しなければならぬと一途に思いこんで安置室に行ったのです。安置室はうなぎの寝床のように長く、三室に区切られてありました。手前が死者と別れを告げる畳の間になっています。中央がコンクリートの間で遺体安置室になっています。一番奥が解剖室です。私は中央の間に入り、亡妻のベッドに近づき、その枕許にしゃがみました。亡妻の顔にかけてあった覆いを取ったとき、亡妻の口から淡紅色の泡が吹き出しました。私は亡妻が活着ているのではないかと一瞬思ったほどです。この亡妻に生前告白し赦しを乞おうとして遂に果すことのできなかつた秘密を告白し、赦しを乞おうとしたのです。それと同時に亡妻の影に抱きしめたいような愛着を感じました。死という最も厳肅な場所で自己の罪をざんげし、改心しようとする瞬間に、もう一つの私は亡妻の身体に強く惹かれたのです。その時でした、安置室が船のように上下左右に大きく揺れ始めたのです。またかと思い、私はひしと原因を究明しようと思いました。窓の外には竹の枝がガラス戸近くに垂れ下がっています。松、杉もありましたが微動もしません。私は一瞬にして風でないこと、地震でないことを知りました。そして恐怖の余り安置室から逃げ出しました。そしてそ

の春、一夜にして失明しました。この年一年は怒りの神との格闘であったと言ってよいでしょう。私を責め私を裁く神を受入れることが出来なかつたからです。この神を私が受入れたのは口マ書三章21節以下の、神が忍耐して我々の罪を見逃し給うあわれみの神であることをイエスキリストのあがないを通して知ったことにあります。

信仰が真に信仰となるのは具体的な問題を通してでありましょう。信仰の道を求めていると世俗と調和した生活に必ず破れが来ます。この破れが罪の意識であり、神の裁きであります。世俗との調和に罪の意識を感じていなかったのに、或る日、或る時、極めて具体的な事柄を通して神の怒りが啓示されます。それが罪の意識であります。日常生活に神の怒りを感じないとすれば、その信仰は結局は観念に過ぎないでしょう。或いは教会生活と、日常生活の両面を上手に生きている二重信者でありましょう。しかし、誰もがこのような経験をしなければ、真の信仰が得られないとすれば、経験主義に陥ってしまいます。経験を通さなくとも神の怒りとあわれみは受取ることができます。そしてそれが十字架であります。私が過去に経験した神の怒りも、十字架のイエスを知って

その意味を正しく理解出来たのであります。つまり、自己の不信と罪とを自覚的に受取らされたのであります。それ迄の私は汚なさ、不潔さ、みにくさという形でしか理解できなかったのです。それというのも十字架を理解出来なかったためであります。パウロのローマ一章 18 節も十字架を離れては理解できないでしょう。

神の怒りが啓示される場所は十字架以外のどこにも無いからです。同時にまた神の恵みも十字架以外のどこにもありません。

今年が亡妻の二十年記念に当ります。当時の私と現在の私と余りにも変わっているのに驚きます。変わったということは質的变化を意味します。外見上の私は二十年前も現在も余り変わってはいないでしょう。けれども内面的には生れ変りました。キリストによって新たに作り変えられたのです。私は総てのものに対して自由であります。失明も癩も死も自治も政治も私から自由を奪うことはできません。それ故に私は総てのものに対して奴隷になることができます。仕えることができます。そしてそのような生がキリストの型であります。神の子イエスの十字架は総てのものに仕える奴隷の姿であり、復活は総てのものからの解放であります。それ故キリスト者は自由と奴隷、下僕

と主人、王と家来の両極を持っています。それが現実であり、世俗の中に生きるキリスト者の姿であります。この二つのうちのどちらかに偏するとき、現実からの逃亡が起りましょう。我々は現代に生きる限り、全く相容れないこの二つの矛盾に生きる以外に道は無いのです。